難問

絵画教室の展示会に他団体の重鎮が来られて、助言を頂いたという方の話によると、人物像の裏の表現と空間の処理を追求されてはと言われたそうです。非常に抽象的で理解しがたい訳ですが、私の持てる範囲以内の知識で考えてみました。私たちが一般的に見えるものとは、物に光が当たって、反射光を感じ取ることで、これを可視光線といいます。波長の長さで言うと、４００～７００ｎｍ、赤・燈・黄・緑・青・藍・紫。それ以上長くても短くても人間には限界があって見えません。ただし、人間にも差があって、多少限界を超えて見える人がおっても不思議ではありません。太陽光の色は７色の合成されたものです。絵の具は合成されると、黒色になります。従って、空気感は７色の光の合成されたものです。交通信号の赤色は点灯したとき、周りの空間は赤色のグラデーションです。明るいときは見えませんが、暗いときや霧のかかった時などにその現象が見られます。人物を描かれたとき、その裏面は見えませんが、正面に光が当たっておれば、その裏面は陰の色のはずです。陰の色は正面の色の補色をかけた色だと思います。その色が周りにグラデーションを与えているはずです。また、人物の裏面は人物の影があります。その影の色は、例えばりんごがガラステーブルの上に置かれていれば、りんごが映りこみます。従って、床の色と人物の色との合成色となります。あと、気の問題があります。時代物の本に刺客がいると殺気は修練を積んだ者は、感じ取ることが出来るようです。絵の世界では、描く環境の下で、体で感じ取りながら表現していくことが自然に表現されていくものだと自らの体験で言えることが出来ます。